

『若きヴェールターの悩み』について

清水 純 夫

I

ヴェッツラー滞在の書記官イェルーザレムが自殺した時、ケストナーからいち早く詳細な報告を受け取ったゲーテは、のちに『詩と真実』の中で次のように述べている。「突然私はイェルーザレムの死を耳にする。そしてそれが一般に広まった直後に事件の最も正確で詳細な記述に接する。この瞬間に『ヴェールター』のプランが見つけ出された。」¹⁾ また1772年11月初旬のケストナー宛の手紙では、「不幸なイェルーザレム、²⁾ 同じく11月28日の手紙では「親愛なるケストナー、哀れなイェルーザレムに関する報告ありがとうございます。心から気の毒に思います。」³⁾ と述べており、ゲーテがこの事件で大きな衝撃を受けると同時に、イェルーザレムに深く同情していることがわかる。そして『ヴェールター』第2部はケストナーからの報告をもとに創作され、ケストナーをして「『ヴェールター』の第1部ではヴェールターはゲーテ自身である」⁴⁾ が第2部では「ヴェールターは若きイェルーザレムである」⁵⁾ と言わしめる結果になった。とくにヴェールターの自殺の箇所はケストナーの報告のイェルーザレムの自殺の場面に驚くほど酷似しているが、その中でも特徴的なことは、イェルーザレムもヴェールターも自殺する時ともにレッスングの『エミーリア・ガロッティ』を机の上にひろげていたことと、遺体を運び出す際に「牧師は同行しなかった」⁶⁾ という点である。ここにゲーテの深い意図が暗示されているように思われるので背景を探ってみることにする。

1772年5月、法律の勉強のために高等法院のあるヴェッツラーを訪れたゲーテは、同年9月までそこに滞在し、その間にロッテのモデルになったシャルロッテ・ブッフに恋をしたり、イエルーザレムを知ったりしたが、この町そのものはゲーテにとって決して好ましいものではなかった。当時のドイツはイギリスやフランスと違って、あいかわらず市民階級の力が弱いため封建制度が根強く残っていたが、同時にその腐敗も凄じく、国内には無秩序と混乱がはびこっていた。ヴェッツラーもドイツのこうした状況の例外ではなかった。ゲーテは『詩と真実』の中で当時のヴェッツラーの様子を描いているが、それによると高等法院は財源が乏しく陪席判事の定員も満たされていなかったし、未決の訴訟事件も増加する一方であった。訴訟の当事者たちは少しでも有利に事件を扱ってもらうために贈賄や買収を行うのが日常茶飯事になっており、高等法院は墮落しきっていた。ゲーテがこうした状況にいかにか幻滅したかは彼の次の言葉から推察することができる。「だらしなさや怠慢、不正や買収についてのあらゆる細かな逸話が、善を望み自己の内面をこの意味で修練してきた若い人々にどんなにひどい印象を与えざるをえないかは、誠実な人なら誰でも感じるであろう。」⁷⁾ こうした環境にイエルーザレムも身を置いていた。

敏感で、知的で、しかも厭世的と伝えられるイエルーザレムは⁸⁾、1771年にブラウンシュヴァイク公使館付書記官としてヴェッツラーに来たが、ここで彼は2つの不快な体験をする。第1は公使との衝突並びにバッセンハイム伯爵邸で上流階級の集いから追い出されたこと、第2はプアルツの書記官夫人Hへの失恋。この夫人は彼の求愛を拒否したばかりでなく、激しく彼を非難し、屋敷への出入りをも完全に禁止した⁹⁾。彼女のこのような振舞は、ロッテがヴェールターの愛を受け入れることは出来ないとしながらも彼を友として愛し、最後まで友情と同情の気持ちを抱いていたのとは全く対照的である。それゆえイエルーザレムとヴェールターが自殺する

時に『エミーリア・ガロッチィ』を開いていた理由をそれぞれの失恋に求めることは理論的に不合理であろう。反対に、第1の体験をしたイェルザーレムがそのままヴェールターの体験として、作品に組み込まれている点を考慮すると、むしろイェルザーレムとヴェールターのこの第1の体験に本を開いていた理由が求められそうである。しかも『エミーリア・ガロッチィ』は言うまでもなく封建勢力の犠牲になる市民の悲劇を扱った作品であり、「そこでは上流階級の情熱と謀略的な状態が辛辣且つ痛烈に描かれている」¹⁰⁾のである。また「牧師は同行しなかった」は、封建主義においては宗教も基本的には支配階級の道具として利用されていたことを考えると、封建社会に対する抗議の表現と解せられる。それゆえ、この2つのことからイェルザーレムとヴェールターに共通しているのは封建社会の犠牲者ということになる。この結論が果して正しいか否か、また正しいとするなら、ヴェールターの場合にはそれがどのような形であらわれているかを、以下、『ヴェールター』の分析を通じて探ってみることにする。なお、発表とともにヨーロッパに一大センセーションを巻き起こしたのが1774年の初稿であることから、ここではそれをテキストにする。

II

作品でまず特徴的なことは、「制約 (Einschränkung)」という言葉が非常に重視されていることである。「人間の活動力、探究力が閉じ込められている制約をみるとき、あらゆる活動の帰着するところは欲求を満たすことだということを見ると、しかもその欲求は我々のみじめな存在を引きのばすという目的しかもっていないのだが、そしてさらに探究者のある地点での安らぎは、自分を取り囲んでいる壁にさまざまな姿や明るい展望を描いているからただ夢うつつの諦めにすぎないということを見ると、ヴィルヘルムよ、ぼくは口が利けなくなるのだ。」¹¹⁾この「制約」を前にした時、

ヴェールターは人間を2つのタイプに分類する。一方は、子供のレベルと大差のない人々、つまり「大人も子供と同様にこの地上をよるめきまわり、どこから来てどこへ行くのかもわからなければ、真の目的に従って (nach wahren Zwecken) 行動することもわからず、ビスケットやケーキやむちで支配されるという点では子供と同じである。」¹²⁾ 要するに「制約」を「制約」と感じないで、いわば本能的に生存にのみしがみついている人々、彼らは「制約に喜んで従い、習慣の軌道を走り、右も左も気かけまいとする内的衝動」¹³⁾ によって動き、結局封建社会に立ち向かう主体性を全く放棄し、逆に無批判にその「制約」の中に安住を求めるのである。

それに対してもう一方のタイプの人々は、このような「制約」を牢獄と感じ、これから脱出しようとする。たとえそれが現実には不可能であっても、少なくとも内面的には自殺という行為を通じてその主体性を貫こうとする。つまり「どんなに制約されていても、望む時にはいつでもこの牢獄を去ることができるという自由のあの甘い感情を心に抱いている」¹⁴⁾ のである。後者のタイプに属するヴェールターは、「制約」の支配する町や人々から離れてひたすら春の美しい自然に身をゆだねる。自然は彼にとって限りなく美しく、そして神聖である。彼は自然の中に「全能者の現存」¹⁵⁾、「博愛者の息吹」¹⁶⁾ を感じる。このように自然はヴェールターにとって絶対的な存在であり、この自然に全く身をまかすことで彼は「静かな存在の感情に沈み」¹⁷⁾、「大変幸福だ」¹⁸⁾ と感じるのである。

自然に埋没しようとする彼の性向は、まさに当時の社会条件に規定された1つの特徴的な意識形態である。すなわち、封建制度の矛盾と桎梏を感じながらも、遅れたドイツの政治的・経済的状況から、それを克服していく理性的展望をこの時代には持ちえなかった市民階級は、この理性的展望に基づいて、つまり「真の目的に従って」自己に価値を付与し、自己の存在に意味を持たせるところの有意義な活動をすることが出来なかった。そ

れゆえ彼らは自己の存在意味を外に求めざるをえず、外部依存が不可避となる。ヴェールターも例外ではない。こうしてヴェールターは理性的展望のかわりに自然を絶対化し、この自然に帰依することで自己の存在に価値と意味を付与しようとする。彼のこのような姿勢はやがて自然に反するものへの仮借なき批判へと発展する。そしてヴェールターはいわば自然の神意にかなったこの行為の中にまさに「制約」からの脱出を求め、永遠な自然と一体になることを求めるようになる。その行動は具体的には、絶対者の刻印を帯びた外的自然に即して内的自然、すなわち感情を解放し、この神性化された自然な感情を判断の主体となし、その判断に基づいて不合理な封建社会を支える理性と対決するという形をとってあらわれる。だから図式としてはいわば自然感情対封建理性となる。そしてこの闘争の典型的な例はヴェールターとアルベルトの論争、並びに公使館勤務の描写にみられる。

アルベルトはここでは封建制度を全面的に肯定する人物として描かれている。彼にとっては封建制度に忠実な人間は「理性的 (vernünftig)」であり、「倫理的 (sittlich)」なのである。それに対し、封建制度に感情的に反発し、それに従順でないヴェールターのような人間は、彼からみれば「酔っ払い (ein Trunkener)」であり、「気狂い (ein Wahnsinniger)」なのである。一方、ヴェールターからみれば、「何か偉大な不可能なことを成し遂げた非凡な人間は昔から酔っ払いとか気狂いとか罵しられなくてはならなかった」¹⁹⁾となる。このように2人の価値基準は全く異なっている。アルベルトは明らかに封建制度を支える封建理性を基準にして判断している。それに対しヴェールターはその封建理性そのものを否定する。たとえばアルベルトにとっては、封建社会の中で苦悩に耐えられず反抗したり、逃避したりする者は「弱い」ということになるのであるが、ヴェールターは、「ある暴君の耐え難い圧制のもとで苦しむ民衆が、ついに激昂して鎖を断

ち切る時に、君はそれを弱いと言えるのか²⁰⁾、そして「問題は人が弱いか強いかではなく、苦悩の限度に耐えられるかどうかだ²¹⁾」と反論する。このようにヴェールターの場合には、人間が耐えることもできない程の苦痛を与える封建制度そのものに攻撃の鋒先が向けられているのである。

また公使館勤務の時期には、彼は貴族たちの特権的身分意識を思い知らされる。貴族と市民の間にはいわば無限の距離がある。こうした社会の中でヴェールターの同僚たちは、身分制の肯定を当然の前提にしつつ、その中で他人より一歩でも出世しようとする排他的な「出世欲 (Rangsucht)」に駆りたてられた俗物どもである。彼らは市民階級としての自覚も無く、ただ貴族たちにおべっかを使い、そしてその下僕たることに満足している点ではまさに主体性を喪失した「あやつり人形」である。「ぼくも一緒に演じる、というよりむしろあやつり人形のように演じさせられるのです。そしてしばしば隣人の木製の手にさわってはびっくりして飛びのくのです。」²²⁾ もともとこの作品の中でヴェールターが少くとも積極的に身分制を肯定している箇所はない。現に身分制が存在し、それが撤廃されていない以上、「我々は平等ではないし、平等ではありえない²³⁾」のが現実である。またいっけん身分制を肯定するような次の場合でもただし書きがつけられている。「なるほどぼくもみんなと同じように身分の差がいかに必要か、それがどれほどの利益をぼくに与えているかはわかっている。ただそれがこの地上でわずかな喜びや幸福のかすかな光を楽しむさいの障害になっては困る。」²⁴⁾ しかもヴェールターが理想とする人間関係は、たとえば族長時代のホメーアの世界、つまり上の者も下の者も別け隔てなく親しく交わっている世界であり、それは当地においてはC爵やB嬢のような貴族とも身分関係を超越して人間的に理解しあい、親交を結ぶということである。このように身分関係よりも人間性を優先させ、封建制度の中核とも言うべき身分制度を実質的に骨抜きにすること、これがヴェールターに

とってまさに自然なのである。しかしヴェールターの場合にはこの理想は劇的な形で打ち破られる。つまり彼は貴族の夜会の中から市民であるがゆえに極めて屈辱的な形で追い出されてしまう。こうしてヴェールターは結果として封建勢力に負かされるが、この敗北の原因は身分制に固執する勢力の方がヴェールターや彼に理解を示す貴族より圧倒的に優勢であったことによるのである。これはまさに市民階級の歴史的限界に他ならない。それゆえゲーテがヴェールターの身分制克服のこの理想を真に現実的なものとして追求する『ヴィルヘルム・マイスターの修業時代』²⁵⁾を完成することが可能となるのは、自由・平等を旗印にするフランス革命がドイツを震撼させる90年代になってからのことである。こうして自然を価値基準にしてのヴェールターの封建理性との闘争は結局彼の敗北に終わる。しかもこの敗北は同時に彼が自然から疎外されることを不可避とする。なぜならこの敗北により、ヴェールターにはもはや反自然な封建制度に対する闘争という自然の神意にかなった活動を通じて、主体としての自己と客体としての自然の対立を止揚して、いわば自然と渾然一体となり、そうして自己の価値をこの永遠な自然を通じて確証するということが不可能となったからである。こうしてヴェールターは自然に対しては結局受動的にとどまり、自然から疎外されざるをえないのである。

しかも自然を価値基準にするということはそもそも最初から大きな内部矛盾を抱えている。すなわち自然には相反する2つの面があるということである。一方は美しい、神聖な自然であり、反封建主義闘争の武器となりうる自然である。しかしこの自然は歴史的条件如何では人間を破滅に導く危険があり、ヴェールターの場合がまさにその例であった。他方は盲目的な恐るべき破壊力としての自然である。ヴェールターは自然からの疎外がだんだん自覚されてくる第一部のおわりごろにこのことを悟る。「ぼくの心を掘りくずすのは自然の全ての中に隠れているあの食い尽していく力だ。

自然がつくったもので隣人や自分自身を破壊しないものは何も無い。』²⁶⁾このような自然はまさに「永遠に飲み込み、反芻する怪物 (ein ewig verschlingendes, ewig wiederkäuendes Ungeheuer)」²⁷⁾である。自然のこの互いに矛盾しあう2つの側面が止揚されるのは、自然の盲目的活動に合目的性を与えるところの人間の目的意識的な集団行動を提示する『神性』という詩まで待たなければならない。しかしそれは約10年後のゲーテである。ここでは自然を武器に闘うヴェールターは、自然から疎外されるとともに自然のこの反面にも蝕まれていく。こうして今となっては自然は彼にとって自己の価値を確証する対象としての存在の意味を喪失し、封建制度と並んでもはや彼を破滅させる怪物以外の何物でもなくなったのである。理性的展望に基づいた有意義な活動もできず、また自然に価値基準を求めすることもできなくなったヴェールターは、自己の存在に価値を与えることはできず、自己の存在意味を失った彼の破滅はこうして避け難いものとなる。つまりヴェールターの破滅はロッテとの関係とは別にそれだけで独自の必然性に貫かれているのである。

III

では、ロッテはヴェールターにとって一体何であったのであろうか。自然からの疎外過程はロッテへの恋の中にも固有の形をとってあらわれる。自然の中の「博愛者」に憧れつつも、自然からの疎外を強いられていたヴェールターは、1人の理想化された人間の中に自然の永遠性を予感し、その人への愛に埋没することによって自然の中では与えられなかった充足を求めようとする。つまりロッテを理想化し、その理想化された絶対者から愛されることによって自己の価値を肯定してもらい、存在に充足すること、これがヴェールターの基本的な姿勢である。だから彼の口からは次のような言葉が出て来るのである。「ぼく自身がぼくにとって何と価値あるもの

になることか……彼女がぼくを愛して以来。』²⁸⁾ 婚約者（のちの夫）アルベルトの存在は、ロッセとヴェールターの間の障害としてかえってロッセ像の理想化を助ける結果になっている。のちにはロッセ自身、ヴェールターが愛しているのは生の自分ではなく、一緒になることができないがゆえに理想化された自分ではないかと感じている。「私を所有することが不可能だということがあなたにこの願いをそんなにも魅力のあるものにしていないのではないかと思います。』²⁹⁾ しかし自己を生かす有意義な活動もできず、自然から疎外されたヴェールターにとって、ロッセのもとに自己の価値確証を求める愛は結局現実に背を向けた逃避的な性格を帯びざるをえない。それゆえヴェールターはこうした愛に決して充足することができないばかりか、常に焦燥と不満に悩まされ、そのため愛を求める行為は際限なくエスカレートしていく。その変化を少し辿ってみよう。ロッセと知りあって1ヶ月した7月16日の手紙には、「彼女は神聖だ。彼女を前にすると全ての欲望が沈黙する。』³⁰⁾ とある。ところが自然から疎外され、社会からも閉め出された1年後のヴェールターは、「彼女がぼくの妻、太陽の下で最愛の人をこの腕に抱きしめることができたなら——アルベルトが彼女のしなやかな体を抱いていると思うと戦慄が全身を走るのだ。』³¹⁾ (7月29日)、「昨夜！口にするだけで震えてくるが、ぼくは彼女を腕に抱きしめ、しっかりと胸に押しつけ、愛をささやく彼女の唇を限りないキスで覆ったのだ。』³²⁾ (12月17日)と言う。

このようにロッセに対するヴェールターの愛の中では官能的な側面が急速に増大し、やがてその頂点をむかえるにいたる。ロッセにオンアンを朗読していたヴェールターは感きわまって思わずロッセを抱擁するが、オンアンの主人公たちの悲劇的な運命に自分たちの運命を感じたロッセも自分の感情を制御しえず、ヴェールターの愛に應えてしまう。この決定的瞬間はヴェールターにとって3つの意味がある。まず第一は、ロッセが自分を

愛しているということをはっきり確信できたことで、自分の価値が最高に肯定されたことを感じ、今まで求めていた「彼女がぼくを愛しているという幸福感 (das Wonnegefühl: sie liebt mich!)」³³⁾ を味わうことができた至福の瞬間である。第二は、しかしロッテとの関係はこれでおわりを告げざるをえないということである。仮にそれ以後もこの関係が続くとしても、有意義な活動の中に充足できないヴェールターにとって、その代償をロッテとの愛に求めるようなこうした愛がいつまで長続きするかは疑問である。肉欲地獄への無限の耽溺、理想化されたロッテ像の崩壊と価値基準としてのロッテの存在意味の喪失、ヴェールターの絶望。こうした経過をヴェールターが今後辿るであろうことは容易に想像できる。ゲーテがフリーデリーケやリリーと親しい関係にあったにもかかわらず彼らのもとを去ったのも、彼が未だ活動と人生について充分展望を抱くことができなかつたため、ヴェールターがこのままロッテとの関係が続ける限り陥っていくであろう危機と同種の危機を自分の場合にも予感したためではないだろうか。イタリア旅行をおえて、古典主義を確立して以後によりやくゲーテが家庭を築くことになるのもそのことを裏づけているように思われる。さて第三は、この行為がアルベルトとロッテの家庭の平和を破壊せざるをえないということである。この点では、ヴェールターは「罪 (Sünde)」や「責任 (Schuld)」を感じている。これらを償うためにはヴェールターは身をひかねばならない。しかもアルベルトとロッテの幸福のために身をひくという大義がどうしても欠けてはならない。以上の3点から出て来る結論が犠牲死である。この犠牲死によってはじめてヴェールターは罪の意識からも解放され、しかも愛する人の幸福のためにということでの自分の死の行為に価値を付与することができるのである。こうしていわば甘い犠牲死をヴェールターは実行する。だからロッテがヴェールターに対して持った究極の存在意味は、結局「死に到る病 (eine Krankheit zum Tode)」³⁴⁾ にとりつかれたヴェー

ルターに、自己の価値を確証することのできた至福の瞬間を味あわせたという点にある。

IV

しかしこの至福の瞬間は死に直結せざるをえなかった。これはまさに当時の歴史的限界である。『ヴェルター』を書きあげたゲーテは当然そのことを悟っていたはずである。だからこそニコライが『若きヴェルターの悩み』をもじった『若きヴェルターの喜び』³⁵⁾を書いた時、あれほど激しく怒ったのであろう。ニコライのこの作品は1775年に出版されたが、ここではヴェルターの自殺の場面が全く変えられている。筋は大体次のとおりである。

ロッセとヴェルターの抱擁の後、アルベルトが帰宅してロッセから事の一部始終を聞く。彼は自分が身をひくべきだと考える。そこへヴェルターの下僕がピストルを借りに来る。アルベルトは実弾のかわりに鶏の血のつまった袋を装填して渡す。その結果、自殺の現場は血だらけになるが、駆けつけたアルベルトから全てを聞かされたヴェルターは狂喜して飛び上がる。そしてロッセとヴェルターは結婚し、子供も生まれて幸福に暮らす。

この作品を読んだゲーテは、すぐさま『若きヴェルターの喜びの逸話』³⁶⁾を書き、鶏の血の弾丸でなるほどヴェルターは死ぬことはなかったが、そのかわり当たりどころが悪く失明し、ロッセとの楽しくるべき結婚生活もさんざんだったとしてニコライに反撃している。さらにゲーテは風刺詩でもニコライを皮肉っている。

ヴェルターの悩みから

それ以上に彼の喜びから

神よ、我々を守りたまえ³⁷⁾

また晩年には『詩と真実』の中でニコライの『ヴェールター』について、「ここでは何も調停のしようのないこと、ヴェールターの青春は初めから猛毒の虫に刺されたようなものだということが全くわかっていない。」³⁸⁾と述べている。啓蒙家ニコライの意図はどうかであれ、『若きヴェールターの喜び』はヴェールターの苦悩を個人の内面的な問題に矮小化し、その苦悩の真の原因たる封建社会を結果的には免罪している。それゆえ、最初から時代の犠牲者たるべき宿命を背負った人物としてヴェールターを描いたゲーテが、本質的な問題解決を回避し、単に小手先の手直しの上に成り立っているこの虚構の幸福を肯定することは不可能であり、ニコライの『ヴェールター』を容認できないのは当然のことであろう。

ヴェールターの悲劇は、理性的展望に基づいた有意義な活動と、それを通じて存在に充足することが不可能という歴史的状況に真の原因があり、ヴェールターの辿った運命はまさにこうした市民階級の歴史的悲劇の1つの典型的な現象形態である。存在に充足しがたく、人間性の荒廃が進行している今日、現代人にとってもヴェールターの悲劇的行動原理は意外と重なる部分があるのではないだろうか。それと同時に、我々はヴェールターの苦悩の真の克服は歴史的状況の変革を通じてのみ可能であるということも、この作品からでてくる1つの結論として冷徹にみておく必要がある。

註

- 1) Goethes Werke. Hamburger Ausgabe (以下 H.A. と略) 6. Aufl. 1967. Bd. 9, S. 585.
- 2) Der junge Goethe. Hrsg. v. Hanna Fischer-Lamberg. 1966. Bd. 3, S. 7. Walter de Gruyter.
- 3) ibid., S. 11.
- 4) Kestner an August v. Hennings. 7. 11. 1774. Goethes Werke. H.A. 7. Aufl. 1968. Bd. 6, S. 523.
- 5) ibid., S. 523.
- 6) Der junge Goethe. 1968. Bd. 4, S. 355.
- 7) Goethes Werke. H.A. Bd. 9, S. 539.

- 8) イェルーザレムと親交のあったレッシングは彼について次のように書いている。

„Es war die Neigung zu deutlicher Erkenntnis; das Talent, die Wahrheit bis in ihre letzte Schlußwinkel zu verfolgen. Er war der Geist der kalten Betrachtung. Aber ein warmer Geist, und so viel schätzbare;“ (Lessing. Gesammelte Werke in 10 Bänden. 2. Aufl. 1968. Aufbau-Verlag. Bd. 7, S. 561.)

„Wie empfindbar, wie warm, wie tätig sich dieser junge Grübler auch wirklich erhielt, wie ganz ein Mensch er unter den Menschen war:“ (ibid. S. 563.)

- 9) Der junge Goethe. Bd. 4, S. 351f. 参照
- 10) Goethes Werke. H.A. Bd. 9, S. 569.
- 11) Goethes Werke. Berliner Ausgabe (以下 B.A. と略) 2. Aufl. 1970. Bd. 9, S. 13.
- 12) ibid., S. 14.
- 13) ibid., S. 28. なお、この引用から「制約」は人間の有限性という制約だけでなく、因襲、道徳のような特定の時代の社会的制約という意味をも含めて使われていることがわかる。
- 14) ibid., S. 14.
- 15) ibid., S. 9.
- 16) ibid., S. 9.
- 17) ibid., S. 9.
- 18) ibid., S. 9.
- 19) ibid., S. 47.
- 20) ibid., S. 48.
- 21) ibid., S. 48.
- 22) ibid., S. 67.
- 23) ibid., S. 11.
- 24) ibid., S. 65.
- 25) とくに「塔の結社」の理念、並びに市民ヴィルヘルムと貴族ナターリエの身分を越えた結婚
- 26) Goethes Werke, B.A. Bd. 9, S. 54.
- 27) ibid., S. 54.
- 28) ibid., S. 38.
- 29) ibid., S. 96f.
- 30) ibid., S. 39.
- 31) ibid., S. 77.
- 32) ibid., S. 93.
- 33) ibid., S. 111.

- 34) *ibid.*, S. 49.
- 35) C.F. Nicolai: Freuden des jungen Werthers. Deutsche National-Literatur. Hrsg. von J. Kürschner. Bd. 72. (1974. Bd. 98. S. 373-377. Sansyusha)
- 36) Goethe: Anekdote zu den „Freuden des jungen Werthers“ Goethes Werke. B.A. Bd. 9, S. 260-263.
- 37) Goethes Werke. B.A. Bd. 9, S. 260.
- 38) Goethes Werke. H.A. Bd. 9, S. 590.

主要参考文献

- F. Gundolf: Werther. In: Goethe. 3. Aufl. 1917. Berlin.
- H.A. Korff: Geist der Goethezeit. 9. Aufl. 1974.
- G. Lukács: Die Leiden des jungen Werther. In: Goethe und seine Zeit. Bd. 7, Luchterhand. 1964.
- E. Staiger: Die Leiden des jungen Werthers. In: Goethe. 4. Aufl. 1964. Zürich.
- H. Reiss: Die Leiden des jungen Werthers. In: Goethes Romane. 1963. Bern.
- W. Rehm: Der Todesgedanke in der deutschen Dichtung. 2. Aufl. 1967. Tübingen.
- P. Müller: Zeitkritik und Utopie in Goethes Werther. 1. Aufl. 1967. Berlin.
- W. Staroste: Werthers Krankheit zum Tode. In: Raum und Realität in dichterischer Gestaltung. 1. Aufl. 1971. Heidelberg.
- K. Hotz: Goethes „Werther“ als Modell für kritisches Lesen. 1. Aufl. 1974. Stuttgart.

Über „Die Leiden des jungen Werthers“

Sumio SHIMIZU

Im damaligen Deutschland, wo der Feudalismus vorherrscht und das Bürgertum noch schwach ist, kann Werther sich nicht „nach wahren Zwecken“ betätigen. Er sucht in der Natur den Sinn seines Daseins. Indem er danach strebt, seine Tätigkeit nach der absoluten Natur zu gestalten, will er alle Beschränkung abschaffen und mit der

ewigen Natur eins werden. Aber dieser Wunsch muß mit den Vorstellungen des Feudalismus in Konflikt geraten und Werthers Niederlage ist wegen der Schwachheit des Bürgertums unvermeidlich. Deshalb muß er sich schließlich von der Natur entfremdet fühlen. Die Natur verliert für ihn nun den Daseinssinn als den seinen Wert bestätigenden Gegenstand, und sie wird endlich nichts anders als das Ungeheuer, das ihn verzehrt und zugrunde richtet. Sein Untergang ist also auch ohne Lotte unabwendbar. Lotte spielt nur die Rolle, daß sie ihn durch die Liebe von seinem Wert überzeuge und das Glück des Daseins genießen läßt. Zwar dauert dieses Glück nicht lange, sondern es muß ihn sofort zum Tode führen. Wenn wir weiter die Geschichte von Jerusalem und die Kritik von Goethe an Nicolais „Werther“ zusammenfassen, können wir schließlich sagen, daß Werther ein Opfer des Zeitalters sei.